

妻が、浮気をしているかも知れない。
結婚して三年、昔の歌謡曲にも歌われたように、それはよくあること、なのかもしれない。ただ、私の心は穏やかであるはずがなかった。

疑念を持ち始めたのは、ほんのささいなことがきっかけだった。近頃妻は、週末になると、私に何も言わずに出かけることが多くなった。最初のうちは、特に詮索しないでおいたが、さすがに、彼女が酔って帰ってきたり、帰宅が極端に遅くなるが多くなると、疑念の一つも挟みたくなる。結婚する時は、『お互い、隠し事の無い家庭にしよう』と誓い合ったのに、だ。

友人に相談した。「夜遊びをしているんだろう」と、電話口で奴は言った。そんなことは分かっている。問題は、そこに男が絡むか否かだ。「そりや絡むだろう」奴は、続けて無責任に言い放った。私は疑心暗鬼にとらわれた。決定的な証拠がつかめたならともかく、その時はまだ、これという物がなかった。妻を問い詰めるには時期尚早な気もしたし、もし違っていた場合、疑った罰は、今度は私の方に返ってくる。だから、しばらくは堪えた。

悶々とした日々が続いた。家で酒を飲んでも、いっこうに気分が晴れる兆しはない。と言うか、どろどろした気分が飲む酒は、こんなにも味気ないものなのかと、今さらながらに思った。

私はバーボンやブランデーなどの洋酒をたしなむ。自宅には小さなホームバーもしつらえてあって、休日前の夜などは、自分でカクテルを作って飲んだりする。色鮮やかなカクテルは、作るのも飲むのも楽しいものだが、：：：気分次第で、泥水にも劣ることが、ここ最近で分かった。それほど、その時の私は、誠にどろどろとした気分だった。

うまい酒が飲みたい。私は痛切に思った。友人を誘うのも手だが、一人でグラスを傾けたい。カクテルを自分でたしなむと言っても、所詮アマチュア。たまには、プロの作った物を飲みたい。そして、泥のようにではなく、ほんのりと、いい気分が酔いたい。そう思った。

そのささやかな願いを叶えるべく、私は、適当なバーに飛び込みで入ることにした。
：：：こう言うと洒落ているように思われるが、それまでの私は、

三十路も半ばを過ぎたいい年なのに、『一人で』バーに入る、ということを、一切したことはないタイプだった。仲間となら、何度となく行っているのだが：：こと、一人となると及び腰になってしまふ。このあたり、私は気が小さいのだ。

だから、自分なりに下調べをして、ぼったくられることのないだろう店を直感で選び、精一杯の勇気を振り絞っての行軍となったわけだ。

家から、小一時間ほど電車に揺られて、駅前の表通りを歩く。外はあいにくの：：それもかなりの雨だった。何もこんな日に出かけなくてもいいような気もするが、『飲みたい』と思った時が今なのだ。それに、雨の日に酒を飲みに出てはいけないという法もない。

学生時代によく繰り出した繁華街の、裏手に回る。猥雑な雰囲気、若干萎縮しながら、目的の店を探した。やがてたどり着いた雑居ビルに、その店名があった。目だつた看板もない。エレベーターを上げて、店の前に立つと、マンションの一室のような扉が待ちかまえていて、私は、拍子抜けするやら、逆に空恐ろしいやらで、一瞬入るのをためらつた。

それでも、ここまで来たからには、後戻りは出来ない。そう思つて、私はドアノブに手をかけた。

「いらつしやいませ」

「あの、一人なんですけど、いいですか？」

「構いませんよ、さあ、どうぞ」

本間にマンションの一室を改造しただけのような、五、六人座ればそれで満員になるようなカウンターと、テーブル席一つだけの店内には、私とマスター以外、誰もいなかった。店内には、よくわからないが、落ち着いた感じのロックミュージックが流れている。雰囲気はいい。後は、このマスターがどんな酒を飲ませてくれるか、期待と不安を相半ばにしながら、私は、カウンターに座つた。

ところで、私の好きな酒に、アブサンというものがある。

フランス、スイス、チェコ、スペインを中心に、ヨーロッパ各国で作られている、薬草系リキュールの一つだ。ニガヨモギ、アニス、ウイキョウ等を中心に、複数のハーブ、スパイスを主成分とする。分類上はリキュールなのだが、アルコール度数が高く、七十パーセント前後のものが多し。低いものでも四十パーセント程度。聞く

ところによると、製品によっては九十パーセント近いものもあるらしい。

色は薄く緑を帯びており、水を加えると白濁するのが特徴の一つだ。他のリキユール類と全く異なる、特殊な香りと味を持っていて、万人受けする特質ではないが、その見た目も含めて、魅惑的な要素が強烈で、一度好きになると手放せない人もいるらしい。私もその一人だ。

このアブサンであるが、一説に、主成分のニガヨモギが、向精神作用を及ぼすらしい。歴史上の偉人では、詩人のヴェルレーヌや、画家のロートレック、ゴッホなどが、このアブサン中毒で身を滅ぼしたとされている。そのせいか、二十世紀初頭には、製造、および流通が世界的に禁止されたという経歴がある。

しかし、近年になって、ニガヨモギの濃度が低い物ならばよしとするように法が改められ、今では、ちよつと大きめの酒屋に行けば、割と普通に置いてあるようになった。

アブサンは、前述の通り、特殊な味と香りを持っているため、カクテルの材料として重宝される。私が好きなのは、『ドリーム』と名付けられた一杯だ。レシピは、ブランド二に対し、オレンジキユラソーが一。そこに、くだんのアブサンを数滴垂らし、シェーカーでよくシェイクする。文字通り、程よく夢見心地になれる、うまいカクテルだ。

「ふう……」
だが、いきなりお気に入りのカクテルを頼みはしない。

私は、手始めに、棚の中で目にとまったアイリッシュウイスキーをロックで舐めながら、タバコに火を着けた。

「……」
マスターは、沈黙を保っている。不必要にペラペラしゃべるタイプではないのだろう。その点も、私は好ましいと思った。ただ、こういう場で、沈黙はあまり酒の肴にならない。そこをこのマスターも知っているのか、ややあつて、マスターの方から話を振ってきた。

「この店は、初めてなんですよね？」

「ええ、そうです。ちよつと、一人で気楽に入れるバーはないものかと思って、調べまして」

「ネットです、ですか？」

「はい」

つくづく、便利な時代になった物だと思う。「一人で入れるバー」というのをキーワードにして、ネットを検索してみると……いくつ

かの店がヒットする。臆病者の私が、見知らぬ店に飛び込みで入るような蛮勇を発揮できたのも、ネット上に、この店の情報が載っていたからに他ならない。

「それはありがとうございます。ございます。ですが、あの情報は古いんですね……」

苦笑いのマスター。詳しく話を聞いてみると、彼はくだんのグルメ情報誌の副編集長と友人であり、そのついで掲載してもらったのだという。そして、雑誌の情報がネットに転載されて、更新されないまま今に至っている……と。

「別にいいんじゃないですか？」

私は返した。掲載されている店が潰れていたとかなら話が別だが、少なくとも、このバーに関しては、まだ営業を続けている。客を呼ぶための媒体露出なのだから、効果はまだあると見ていいだろう。現に、私という新規の客がやってきたわけだし。

「ところで、お兄さんは、お酒をよく飲まれるのですか？」

三十五の男を『お兄さん』呼ばわりすることに、若干の驚きはあったが、その一言で、この店に来る客層が分かったし、気さくな感じがにじみ出ていたので、気分は悪くならなかった。それはさておき。

「ええ、まあ。家では、ちょこちょこ飲むんですけどね。たまには、プロの作った物が飲みたいなと……」

「ははは、それはどうも」

人なつつこい笑みで、マスターは笑った。

「おかわりは、いかがですか？」

「そう、ですね……」

私は、結構な量の酒が並んでいる棚を眺めながら、少し思案した。自分が知りうる限りのカクテルならば、きつとすぐさま出てくるだろう。ただ、私がそれに関するうんちくを垂れてもつまらない。

「何か、マスターの直感で一杯作ってもらえますか」

「はい、分かりました」
そううなずいた瞬間、マスターの目が、少し細まった。顔を見ている。おそらく、私からにじみ出ているだろう『空気』を読んでいるのだ。

そして、マスターは手際よく動き始めた。私は、彼の手元を見ない。材料が分かっってしまうと、少しつまらない気がしたからだ。

カシヤカシヤカシヤ……と、リズムカルな、まるで楽器のようなシェーカーの音がして、やがて、私の目の前に、琥珀色が満たされたカクテルグラスが差し出される。

「どうぞ。『ドリーム』です」

「おっ……」

なんとということだろう。このマスターは、一目で私の好みを見抜いてしまった。さすが、プロフェッショナルのバーテンダーだ。

「（こう来なくちやな……）」

やはり、最初に頼まなくて良かった。こういうサプライズも、バーに来る一つの楽しみだ。

ひとしきり感心し、ちびちびと飲みながら……私は思い直した。『ドリーム』。すなわち『夢』。もしかすると、今の私を懊悩させる、妻の不貞を、夢だと思いたいのかも知れない。そんな気持ちだが、顔に表れていたのだと思う。

つ……と、もう一口、グラスの琥珀を舐める。家で馴染んだはずの味わいが、明らかに違っていた。批評を垂れる野暮はしない。ただひたすらに、キンと冷えたそのカクテルが、見事に私の味覚にマツチしていた。うまい。

「……」

「……」

この壮年のマスターと交わした言葉は、それきりだった。遠くに聞こえる雨音が、肴だ。悪くない。

時間の経過を、タバコの燃え尽き具合でなんとなく計る。私が一本を吸うのには、約五分かかる。灰皿には、三本の燃えかすと、四本目が半分燃えていた。もうすぐ、私がこの店に来て二十分。だが、それがどうしたというのだろう。私は慌てて、そのくだらない計算をやめた。外の雨は、止む気配を見せなかった。

「ばんわーっす！」

「いらっしやいませ」

私が『ドリーム』を飲み干した頃、一人の客が入ってきた。気さく、と言うよりなれなれしい態度で挨拶し、私とは離れた席にどかっと座ったその客は、見た目、私より少し年下、だが三十路は迎えているだろうとおぼしき男だった。会社帰りだろうか、スーツを着てはいるものの、全体的に、軽薄な雰囲気漂う男だった。

「マスター、『マテイーニ』おくれ、『マテイーニ』！ ジンきつめでね！」

「かしこまりました」

男が注文を繰り返す声。品のない響きに、少し、いらっとする。『マテイーニ』には、性格が表れる……と、私は思っている。一般的なレシピは、ドライジンを一に対して、ドライベルモットを一。そこへ、オレンジピターを一ダッシュ。ステアした後、オリーブを一つ落とせばいい。

シンプル・イズ・ベストの象徴たるカクテルだが、その比率いか

んで、無数の顔を見せるのが、『マティーニ』だ。

一つ、私も飲んでみるか。

「マスター、私も同じ物を頼むよ。比率も同じでいい」

「かしこまりました」

やがて、軽薄風の男と、私に、ジンキつめの『マティーニ』が供された。

がつつくような猫背で、先に、軽薄風の男が『ずずつ』と下品にすすった。

「くっはぁーっ！ 辛いっ！ 辛いなあっ！」

顔をしかめる男。騒々しく『ジンキつめで』と言いはなった割に、味わうことをろくすすっぽしていないようだ。

「（やっぱり、ちゃらちゃらしてやがるな……）」

同じ物を舐めながら、私はひっそり毒づいた。

おそらくこの男は、味は二の次で、ファッションのみで『マティーニ』を飲んでいるに違いない。見た目通り軽薄……と言うか、はつきり言わせてもらえば、頭が悪いのだろう。

「……」

私の舐める『マティーニ』には、どことなく味わいがないようだった。

思考しながら飲んでいるからだろうか、

「（私の方にも……）」

そうだ。私の方にも、この軽薄男を徹頭徹尾、悪し様に言える道理はない。

自分にも、こんな時期があったからだ。ちょうど、三十路を迎えたはいいものの、まだまだ遊び足りないと思っていたっけ。

「ねー、マスター。『マティーニ』もう一杯おくれよ。今度は、ちよい甘口で」

「かしこまりました」

口調に甘えが感じられる。守るべき物が無いような感じがする。多分、この男は独身なのだろう。

「（ううむ……）」

私は複雑な気持ちだった。

この男とは、相容れない気がする。ただそれは、『昔の自分に似ていたから』に他ならない。

私の持論は、『人を嫌いになると言うことは、そこに自分を見つめるから』だ。

直感的に人や物を忌避することは簡単だ。しかし、そこに『なぜ？』を付け加えていって、論理的に思考していくと、たいてい、自分の中にある『厭な部分』に突き当たるものなのだ。要は、全て

は近親憎悪に行き着くのだ。このことを、私はとあるビデオ映画監督の著書で知ったのだが、その話はさておこう。

私にも、確かに、この男のような時期があった。遊び足りないと
いうか、一言で言ってしまうえば、大学生の頃で時間が止まっていた
のだ。

勢いだけでやっていけるほど、人生は甘くない。私自身、その学
生気分が抜けきらずに失敗したことは：：あえてこう言おう、豊富
にある。男が続ける。

「マスター、なんか動物タンパク質系のツマミない？　ビーフジャ
ーキーとか、チーズとか」

「すみません、今切らして：：」

「ちえー、なあんだ。ま、このミックスナッツもうまいけどさー」
男は、ぼりぼりと行儀悪くナッツを頬張ると、さらに『マテイ
ニ』をおかわりした。まるで、カクテルはこれ以外認めないと言っ
た感じの頑固さ：：に思えて、気取っているだけだろうことがよく
分かる。

「（ふふふつ……）」

だが私は、ほんの少し微笑ましい気持ちになつた。ただ、その微
笑ましさは、少し黒かった。分かりやすく言えば、軽い呪詛の念だ
つた。

：：そうやって、自分勝手に遊んでいるがいいさ。だが、お前
もいずれ、家庭を持つ日が来る。その時になったら、今までのよう
に、ちやらちやらしていられなくなるぞ。身を固めることの重圧に、
大いに狼狽するといひ：：。

元々がささくれ立った気持ちでこの場に座っていた私は、勝手に
人生の先輩風を吹かせて、男を見下ろしていた。

もごり、と、グラスの中に入っていたオリーブを口に含んで噛む。
普段なら、酒の染み味は美味いはずなのだが、その時の私には、
嫌にしょっぱいだけだった。いや、むしろ苦くさえ思えた。

雨は、相変わらずよく降っていた。

鬱々とした私の心を表すように、よく降っていた。

私が注意をそらしている間に、いつの間にか、その男は店からい
なくなっていた。

またしばらく一人か：：と残っていた『マテイニ』を飲
み干し、さて次は何を：：と考えていると、別の客が入ってきた。

「うつつ、マスター、久しぶりだなあ！」

「こんばんは、いらっしやいませ」

次に来たその客は、年の頃は四十代半ばと言ったところだろうか。ごつい目鼻で構成された顔と、灼けた肌に、深くシワの刻まれた顔立ち。そして、よれよれになった作業服。……一見して、肉体労働者と思われた。

「ああ、くそ。やっぱ、シヤバの空気は最高だぜ！」

「お務め、ご苦労様でした」

「へへつ、あんがとよ。ところで、知ってるかマスター？ 最近は、塀の中でも恵まれてるんだぜ？」

「そうなんですか？」

「おうよ。少なくとも、『臭えメシ』つてのは、もうないねえ。下手すりゃ、そこらの男やもめが作るよか、豪華なんだぜ！ きちんと、栄養士がメニューを管理しててよお！」

「……!?」

私は、どかっと私の二つ隣に座るやいなや、得意げに語り出したその男の言葉に、少しぎよつとした。

『シヤバの空気』、『塀の中』、『お務め』、『臭いメシ』……それから連想されるのは、どう考えても刑務所だ。男は、どうい事情があつたのかは知らないが、そこから帰ってきたばかりのようだった。

「自由はいいねえ！ マスター、この自由を祝すような一杯をくれないかい？」

「では……」

一瞬思案したマスターが、手元を素早く動かす。やがて出てきたのは、ライムが添えられたコーラだった。男は、怪訝な顔をするかと思つたら、すぐに合点がいったような顔になった。

「おう、こいつあ『キューバ・リブレ』じゃねえか？」

「ええ、そうです」

「自由キューバ万歳！ か。いいね、いいねえ。いただくぜ」

「……」

いかにもうまそうに、『キューバ・リブレ』をあおる男を見て、私は、偏見に凝り固まっていた視点が、少しほぐれていくのを感じた。こんなごつい男が、カクテルに詳しいとは、意外だった。

「（……いかにいかに……）」

私は少し自己嫌悪に陥った。カクテルを楽しむのに、何の資格も素養も必要ない。そもそもが、万人の物だ。誰がどんな理由で飲むとも、それは自由だ。全くの自由なのだ。

「かつはあーッ！ うめえ！ うめえよマスター！ まさに自由万歳だ！」

ついた吐息にまで野太さを感じさせながら、男がしみじみと言う。「ラム酒とライムをコーラで割る！ それだけの酒が、うおお、こ

んなにもうめえ！」

ぐびぐびと『キューバ・リブレ』を飲み干していく男。あつと
う間に、グラスが空になる。

「もう一杯飲みますか？」

「あたぼうよ！　がはは！　自由万歳！　自由万歳！」

豪快に笑いつつ、男は、マスターの作った二杯目を、今度はちびちびと飲んでいく。

「マスター、私にも、『キューバ・リブレ』を」

「かしこまりました」

すぐに、私の目の前にも、爽やかなライムの香り漂うグラスが差し出される。

その炭酸を口に含んで……次に、その野太い男が言った言葉が、
またも私の味覚を鈍らせた。

「へっへっへ、カミさんにやあ心配かけたがよお……帰れるって決
まった時あ、現実味がねえほど嬉しいもんだなあ……」

「……っ……」

私は、また少しイラッと来てしまった。

この男にも、妻がいるらしい。しかも、今カクテルを飲みながら、
愛おしげに細まる目からして……男は、『カミさん』を深く愛して
いることが察せられた。爽やかな『キューバ・リブレ』が、一気に
まずくなる。

「アイツも良くできた女だよお……。こんなロクデナシの俺につい
てきて、なーんにも文句言わねえし、他の男に走ることもねえ」

「（ぐうっ……！）」

しみじみと女房自慢を語る男に、私の苛立ちはますます募ってい
った。こんな男にも、良くできているらしい妻がいるというのに、
私は……。

口の中のラムがくどい。ライムが青臭い。コーラが甘ったるい。
苦々しい思いで飲むカクテルは、泥水にも劣ることが、今この瞬
間で立証されてしまった。

「待ってる相手がいるってのは、いいねえ。いいよ、いい」

「（ふ、ふん……）」

私は内心で、思いきり、その野太い男を唾棄した。

幸せを享受していられるのも、今のうちだ。

いずれ、手ひどく裏切られる日が来るに決まっている。

その日はきつと来る。その時の心の乱れを、あんたは知らない。
辛いぞ。とても辛いんだぞ……。

次第に男を見ていられなくなったのは、多分、眩しかったからだ。ろ。それから、私は脆い人間だ。に話していた。私は、苛立ちを募らせたまま、黙って聞き流していた。

「……あちっ!？」

ぐい、と手元の『キューバ・リブレ』をあたりきって、不意に手元に熱を感じた。気がつけば、手元のタバコが根本まで燃え尽きている。慌ててもみ消し、新しく火をつける。またいつの間にか、刑務所帰りの男は、店から姿を消していた。

雨は、うるさいほどの音を立てながら、未だ降り続いていた。私の苛立ちが、そのまま空模様に変化されたようだった。